

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可(每月一回一日發行)
經濟論叢 第二十五卷 第四號

田島博士
還曆祝賀記念
論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和二年十月一日發行

經濟論叢

第二十五卷第四號

(通卷第四百十八號。禁轉載)

リカアドの勞働者階級將來觀と

功利主義哲學

森 耕二郎

- 目次 (一)問題の提出 (二)リカアドの勞働者階級將來觀 (三)リカアドの勞働政策 (四)リカアド勞働者階級觀の科學性と功利主義哲學

一 問題の提出

古典派經濟學の出發點を成す、若くはその背景に有つ、社會哲學又は世界觀とも見るべきものは、云ふ迄もなく功利主義哲學、個人主義的自然觀である。即ち彼等の問題としたのは自由と平等と所有とペンタムとの行はれる天賦人權の眞樂園である。彼等は一様に純粹に孤立的なる「經濟人」から出發して、凡ゆる經濟現象を、自然秩序、自由の制度を説明しようとする。アダム・スミスの自然法觀はフイジオクラートの獨斷的形而上學的自然法觀から離れ、この經濟の世界を各人の利己心、自愛心から説明してゐる。即ちスミスに従へば、各人が自愛心 (self-love) 利己心

(private interests and passions)の自然の性情に本づき、自己の利益のために活動努力することは、期せずして社會全體の利益、福祉を増進する所以であると云ふのである。にも拘はらずミスは各人の利己的活動は期せずして社會公共の利益を齎らすとか、見えざる手に導かれて結局社會全體の發展と一致するとか云ふのであつて、彼は豫定的に個人の利益と社會の利益との調和一致を説いてゐるのである。彼れの樂觀的なる自然主義的世界觀は猶ほ形而上學的神學的精神から全然脱却し切つたものとは云はれない。マルサスに至つてもなほ多分に形而上學神學的自然主義に蔽はれてゐるのである。しかるにベンタムはこの形而上學的神學的自然主義、哲學から全然脱却し、社會はこれを組成するところの個人の單なる集合よりなる擬制的團體であるとなし、かの最大多數の最大幸福の原理をたて、以て個人主義的自然觀、功利主義哲學を兎に角市めて科學的に説明するに至つた。このフイジオクラシーよりミスを経てベンタムに至る自然法觀の歴史的發展は一概に進歩であるといふことには若干躊躇せざるを得ないが、兎も角かゝる歴史的發展を吾々は迎ふことができるのである。

リカアドは經濟學以外の學問に對する教養が尠かつたことが結果してか、特に自分の哲學、世界觀を持ち合はせなかつたので、彼れの經濟學を離れて獨立に彼れの世界觀、人世觀、社會哲學を述べてゐない。けれども彼れの諸々の經濟學說、政策におのづから一貫してにじみ出てゐるも

の、見方、考へ方は即ち彼れの實踐的なる世界觀、人世觀と目して差支なく、その基調を成してゐるものは云ふ迄もなくベンタムの功利主義哲學に外ならない。即ち從來の古典派經濟學がリカアドに於てその頂點に達したやうに、古典派經濟學の社會哲學たる自然主義的なる功利主義哲學も亦リカアドの經濟學に於てその最も典型的なる具體的顯現を見出し、よりにて當時の學問界、實際界に異常なる影響を及ぼしたものである。

アダム・スミスは生産論をその最も主要なる關心事となし、一國の生産力が如何にして増大するかを問題としたのであるが、マルサス、リカアドはこれに反し、主として分配論を論じ、一國の生産物が如何にしてその生産の參與者たる地主、資本金家、労働者の間に分配されるかを主要なる問題としたのであることは云ふ迄もない。しかし彼等の、わけてもリカアドの主要なる關心事は地代論及び利潤論であつて、勞賃論はこの二者に附隨的に述べられてゐるに過ぎない。それゆゑにリカアドの勞賃論、労働者階級の未來觀、及び労働政策は、前批判期に於ける彼等當時の新興資本家階級の視點より見たるそれであるに相違ない。

リカアドは右の如くベンタムの功利主義哲學を背景に有ち、孤立的經濟人より出發し、自由放任主義を支持しつゝ、前批判期の頂點に於ける當時の資本家階級わけでも工業資本家階級の立場から、如何に労働階級状態の現在及び將來觀を描いたか、且つ又如何なる労働政策を提示した

か？ 當時の資本家階級のイデオロギーとしての功利主義哲學を有つに拘はらず、彼は勞賃論、勞働者階級將來觀の科學的眞實性に如何に接近し、以て科學の歴史に如何に重要な地位を占むるに至つたか？ 而も又その故にこそその科學性に於て如何に限定せらるゝところがあつたか？ ——私はこの小文に於てこれらの問題を吟味して見たいと思ふ。

リカアドは功利主義哲學を背景的に有ち、孤立的經濟人より出發し、又自由放任主義を支持したと云ふも、功利主義哲學を展開したる後、そこから彼れの經濟の原理を導き出したのでは勿論ない。彼に在りては、功利の原理は彼れの經濟學の裡に滲透してゐる。或は寧ろ經驗的に諸經濟事象を研究したる成果としての功利主義哲學とも云ふべきものである。それ故にこの論文に於ては、問題はおのづから功利主義哲學の內的吟味に係はるよりは、それが具現としての勞働者階級の現在及び將來觀、勞働政策の詮索に主として係はるであらう。

二 リカアドの勞働者階級將來觀

リカアドの勞賃論に於ては、勞働の一時的偶然的價格なる市場價格はいつかはその自然價格に歸着するのであり、さうしてこの勞働の自然價格は勞働者並びに彼れの家族の生活資料の價格に一致するものであるが、この生活資料は單に勞働者及びその家族を生理的に維持するに足る絶對

的なる最低額ではなく、それには文化的慣習的なる諸要素を含み、時と處とに應じて種々と可動的なるものである。即ち『勞働の自然價格はそれが食物、必需品に評價せらるゝ場合に於ても、絶對的に確定不動なるものと思つてはならない。それは同じ國に於ても、時により異なり、そして異なる國に於ては著しく相違がある。勞働の自然價格は主として國民の風俗習慣に依存してゐるのである』¹⁾。

斯様にリカアドの勞賃論に依れば、勞賃は勞働者の慣習的なる生活費に歸するのであつて、必ずしも一應それは悲觀的勞賃論と一概に云はれ得ないのである。さればこそ彼は、マルサス人口法則の存在するにも拘はらず、勞働者は自己の努力により自己の境遇を改善向上し、勞賃を恒久的に益々上騰し得るの可能あることを云ふのである。例へば彼れの文章に左の如きものがある。――

『人道の友は、どの國に於ても、勞働者階級が慰樂品および享樂品に對して嗜好を有すべきこと、凡ゆる合法的手段によつて彼等がそれらのものを獲得しようとする努力を鼓舞すべきであること、を望まざるを得ない。人口過剰を防ぐにこれよりも良い保證は有り得ない。勞働者階級が最小の欲望を有してをり、最も低廉なる食物で満足してゐるやうな國に於ては、人民は最大の不幸と貧窮とに曝されてゐる。彼等は災害より逃れる避難所を有たない。彼等はより低い地位に安

1) Ricardo, Principles of Political Economy, Gonner's ed., p. 74. (頗氏譯本 144頁)

全を求むることはできぬ。彼等は既に最低位にあるのでこれ以上落ちやうがない。彼等の主なる生活必需品が少しでも缺乏する場合に彼等が利用し得る所の代用品は殆んどなく、而してその缺乏は饑饉より生ずる殆んど凡ての禍を伴ふのである¹⁾。

吾々は又次のやうな詞にも出會ふ。

『勞働者の地位が向上さるゝのは、彼等により多くの貨幣を、或はそれで勞賃が支拂はるゝ所の増加と食物の増加とは、一般に高き勞賃の結果であつて、その必然的なる結果ではないであらう。勞働者に支拂はるゝ増加せる價値の結果である彼れの改善せられたる状態は、必ずしも強いて彼をして結婚せしめ、家族の世話を見るに至らしむとは限らぬ。——彼は十中八九、増加せる勞賃の一部分を彼れ自身に食物および必需品を豊富に供給するに用ふるであらう、——だがその殘餘を以て、彼は、若し欲するならば、彼れの享樂に役立つ所の、或る貨物——椅子、卓子、金屬器、或はより良き衣服、砂糖、及び煙草——を購買するであらう。然らば増加されたる彼れの勞賃は、これらの貨物の或る物に對する需要の増加といふ結果を伴ふに過ぎないであらう、而して勞働者の種族は著しく増加されないのであらうから、彼れの勞賃は永續的に高きを續くるであらう』(註²⁾)。

1) Ricardo, *ibid.*, p. 77. (同譯本 150-1頁)

2) Ricardo, *ibid.*, p. 400. (同譯本 383-4頁)

(註) トロウア宛の一書信のうち左の如き文句がある。

『一人の男子の勞賃はたゞに彼が十分働らいてゐる時に、彼れ及び彼れの家族を維持するに十分なるのみならず、貴君の云はるゝやうな非常の用に備ふるがために、須く彼をして貯蓄銀行に豫備金を爲さしむるに足るものでなければならぬ、そして又眞に善良なる制度の下に於ては事實然るであらう。』

右は勞賃高の如何に因る勞働者の境遇に對するリカアドの一般の見解であつて、例へば、マージナルの如きは、これらの詞を以てリカアドが決して酷薄なる勞賃論を提唱したるものではなく、彼れも亦人道の味方、勞働者の愛護者であつたことを云ふのである。²⁾

扱てリカアドは勞賃、勞働者の靜的狀態とも云はるべき右の狀態を述べる外、社會の進歩の各段階に於てそれに應じて存在するところの勞賃率、勞働者狀態を云ふ。即ち進歩しつゝある社會に於ては、勞働に對する需要がその供給に超過するが故に、勞賃がその自然率に一致せんとするの傾向あるに拘はらず、その市場率は或る一定の期間常にその自然率の上にある得る。しかるに社會が更に進歩するに至れば、勞働に對する需要は漸次減退するに拘はらず、その供給は依然として同じ割合にて増加し續けるであらうからして、勞賃は下落するに至るであらう、とリカアドは云ふ。さうしてこの理由として、彼はマルサスの人口法則、收獲遞減の法則、地代の理論を以てする。即ちリカアドに従へば、資本蓄積の急激なる場合には、勞働の需要は増大し、勞賃騰貴に因る勞働者境遇の改善向上は延いて人口増加を刺戟するに至るものであるが、この勞働人口の

1) Letters of Ricardo to Trower, p. 48.

2) Marshall, Principle of Economics, 8 ed., p. 508.

増加は必らずや食物價格の騰貴を促し、ために耕作限界は低下せしめられ、劣等地は耕作せらるゝに至る。それがため穀物價格は永續的に騰貴することとなり、随つて又勞賃(實質勞賃に非ず、勞働の價值なり)も亦持續的に騰貴することとなる。随つて起る現象は地代の發生又は騰貴であり、利潤率の低減、資本蓄積の緩慢であり、勞働に對する需要の減退である。その結果は勞働の市場價格がその自然價格以下に降るか、その自然價格それ自らが下落するに至るか、どちらかである。リカアドの詞によれば、『勞働者の運命はより不幸であらう。なるほど彼はより多くの貨幣勞賃を受けるであらうが、彼れの穀物勞賃は減少さるゝであらう。そして彼れの勞賃の市場率をその自然率以上に保つことが益々困難になるの結果、彼れの穀物に對する支配のみならず、彼れの一般的狀態が悪化せらるゝに至るであらう。穀物の價格が一〇パーセント騰貴するならば、勞賃は常に一〇パーセントよりもより少しゝか騰貴するにすぎないであらう。しかし地代は常にそれよりもより多く騰貴するであらう。勞働者の狀態は一般的に退化し、そして地主の狀態は常に改善せらるゝであらう』¹⁾。

これによつて見れば、リカアドに在りては、勞賃率、勞働者境遇は、社會の進歩の初期の發達階段に在りては、かなり良好であり、樂觀的なのであるが、社會の進歩に伴うて漸次不良となり、悲觀的なるものとなるに至るのである。さうして彼が問題としたのは後者であつて、それは

1) Ricardo, *ibid.*, 79. (同譯本 154-5頁)

ちやうど彼れの時代に於ける勞賃事情に外ならない。しかも彼は、かゝる事物の状態は人爲の如何ともすべからざるものであるから、勞働者自らが自己の節欲、努力によりその地位、境遇を改善せんとするは兎も角、殊更に政府、立法の力などに頼りてその状態を改善向上せしめんとするも畢竟徒勞に終るであらうと云ふのである。

以上勞賃の自然價格の可動性並びに社會の進歩に伴うて惹起さるゝ勞賃の變動についてのリカアドの見解を吟味し、以て彼れの勞働者階級状態の現在および將來觀の一端を見たのであるが、更にリカアドが機械使用の勞働者階級に及ぼす影響に就ての所説は、彼れの勞働階級將來觀を最も瞭に示せるもの、一つであらうと思はれる。依りて左に私はその所説の大意を窺うて見る。

機械の使用は勞働生産力の増大であり、勞働生産力の増大は生産費の減少、利潤額の増加であり、随つてそれは社會の進歩に伴うて益々旺んに行はるゝものなるが故に、リカアドが機械使用の勞働階級に及ぼす影響に關する見解は、とりも直はさず、社會の進歩に伴れて惹起される勞働者階級の狀態に對する影響に關する見解に歸する。

リカアドが機械の勞働者に及ぼす影響に關する見解は凡そこれを二つの時期に分つことができらう。第一期に於ては彼は、ジェームズ・ミル、マカロック、トレンス、シニオア、デヨン・

ステュアート・ミルなど、同じやうに、労働者を驅逐する凡ての機械は、いつもそれと同時に又必然的にその同じ労働者の使用に相當せる一資本を遊離するものであるとの見地に在つた。ところがリカアトは例の特徴ある科學的公平と眞理に對する愛好心を以て、後に至つて全然この種の見解を拋棄し、彼れの『原理』の第三版に於て、『機械に就て』なる一章を追加して、この問題について従前は異なる所見を開陳するに至つたのである。當時益々旺んだなれる機械の使用が現實に労働者階級に及ぼせる影響を説明するには、従前の彼れの所説を以てしては最早や十分でないことを悟るに至つたからであらう。

先づリカアトがその初めに抱いてゐたこの問題に關する見解を見んに、彼に在りては、『發達せる機械の影響は労働の眞實勞賃を騰貴せしむる決定的の傾向がある、といふことは今やもう疑ふことができぬ』、『労働を節約する結果を生ずるやうな或る生産部門への機械の斯様な應用は、一般に幸福である。たゞ資本及び労働を一つの仕事から他の仕事へ移轉するに當つて大抵の場合に發生する所のその種の不使が伴ふのみである』。即ち機械が使用せらるゝに至れば、結局に於て貨物の生産費は低減するがゆゑに、地主、資本家はその貨幣地代、利潤を以て、以前よりはより大なる分量の貨物を獲得することが出来る。これと同様な理由により、労働者の階級も亦機械の使用によつて同じ利益を享受し得るに至る、とリカアトは云ふ。即ち彼に依れば、かゝる場

合、勞賃の需要は減退せず、勞賃は随つて下落しないから、勞働者は従前と同じ勞賃を以てより多くの貨物を購買し得るからである。例へば若しも改良されたる機械によつて、同一分量の勞働を使用して、靴下の分量が四倍されるに、靴下に對する需要はたゞ二倍しか増加しないならば、若干の勞働者は靴下製造業から必然的に解僱さるゝであらう。が彼等を使用した資本はなほ存在してをり、そしてそれを生産的に使用することは、それを所有せる人の利益であるから、それは或る何らかの他の貨物の生産に使用さるゝに至るであらう。随つてこの場合、資本家は新しい異なる貨物の生産に勞働を使用せざるを得ないこととなるであらうが、勞働に對する總需要は依然として同じであるであらう。要するに彼れの初期のこの問題についての一般的結論は、『勞働者階級は、他の階級と同様、機械の使用から生ずる貨物の一般的廉價から來る便益に與かるであらう』と云ふにあつた。

右に於てリカアドの假定したる所は、社會の純所得——利潤及び地代の合計——が増加される時には、いつでもその總所得——利潤地代及び勞賃の合計——も亦増加される、といふことであつた。ところがリカアドは後に至つてこの主張を拋棄し、地主及び資本家の收入に充てらるゝところの資金は増加されるかも知れぬが、勞働者の收入——勞賃に充てらるゝところの他の基金は減少するかも知れない。國の純收入を増加するところの同一の原因が、同時に人口を過多ならし

1) Ricardo, *ibid.*, p. 379. (同譯本 345-6頁)

め、労働者の状態を悪化するに至るであらう、この思想に到達するに至つた。即ち彼れの『今確信してゐることは、人間労働に代ふるに機械を以てすることは、労働者階級の利益にとつて屢々甚だ有害であるといふことである』¹⁾。

この點に關してリカードが擧げるところの例證を見よう²⁾。

一人の資本家が二〇〇〇磅の價値の資本を使用し、そして彼は農業者と必要品製造業者の事業を合せ行ふものと假定する。更にこの資本のうち七〇〇〇磅は固定資本に、即ち建物、器具等に放下され、残りの一三〇〇〇磅は流動資本として労働の支持に使用さるゝものと假定する。更に又利潤は一〇パーセントであつて、さうしてその結果として、資本家の資本は毎年その本來の能率状態に置かれてあり、そしてその上に二〇〇〇磅の利潤を生むものと假定する。

さて毎年右の資本家は、一三〇〇〇磅の價値を有する食物および必要品を所有して、彼れの事業を開始する。さうして彼は一年の間に、それを労働者に彼れの支拂ひたる同額の貨幣にて賣却してしまふ。その年の終には、労働者は一五〇〇〇磅の價値ある食物および必要品を産出し、そしてこのうち、二〇〇〇磅は資本家が自分で消費するか、或は他の方法で處分する。この場合この年度の總生産物は一五〇〇〇磅であつて、純生産物は二〇〇〇磅である。

ところが次の年に、資本家は彼れの労働者の半數を一つの機械の製造に使用し、そして他の半

1) Ricardo, *ibid.*, p. 379. (同譯本 346頁)

2) Ricardo, *ibid.*, p. 379ff.

數を以前の如く食物と必需品との生産に使用すると假定すれば、この年度には前年度と同様、一三〇〇〇磅の額を勞賃に支拂ひ、そして同額の食物および必需品を勞働者にそれで以て賣却して、前後變るところがないであらう。

しからばその次の年には總生産物と純生産物との割合はどうであらうか？ リカアドに依れば、機械が製造されてゐる間は、食物及び必需品の平常の分量のたゞ半ばしか取得されない、そして此等は以前に生産されたる分量の半分の價值を有するのみであらう。この場合機械は七五〇〇磅の價值を有ち、食物及び必需品は七五〇〇磅の價值を有つであらうから、資本家の資本はこれに加ふるに固定資本の七〇〇〇磅を以てして、二〇〇〇〇磅の資本と二〇〇〇〇磅の利潤とより成つてゐるから、その額は以前と同じである。さて資本家はこの二〇〇〇〇磅の利潤を自分の消費その他に充てるから、それで以て彼れの事業を引き續き遂行するに充當さるべき流動資本は今や五五〇〇磅よりは多くはないであらう。だから結局勞働使用に充てらるゝ手段、基金は、一三〇〇〇磅對五五〇〇磅の比例に減少することゝなり、その結果、以前七五〇〇磅で以て使用されてゐた勞働が、全部不用に歸する。而して若しかく減少されたる勞働の分量が、機械の助けによつて、七五〇〇磅と同一なる價值を生産して流動資本を補填し、全資本に對して二〇〇〇〇磅の利潤を生むならば、即ち純所得が減少されないならば、總所得が三〇〇〇〇磅であらうが、一〇〇〇〇

磅であらうが、或は一五〇〇〇磅であらうが、それは一向に資本の利害に關はらないのである。かくてリカアドは云ふ――

『しからばこの場合に、たとひ純所得の價値は減少されないうであらうとも、またたとひその貨物購買力は大いに増加さるゝであらうとも、總生産物は一五〇〇〇磅の價値から七五〇〇磅の價値に下落したであらう。而して人口を支持し、さうして勞働を使用するの力は、常に一國民の總生産物に依存し、そしてその純生産物に依存しないがゆゑに、必らずや勞働に對する需要は減少し、人口は多過ぎることとなり、勞働者階級の地位は困窮と貧乏とに惱まざるゝに至るであらう』¹⁾と。

尤も機械使用の結果、貨物の價格が下落したがため、収入が資本に轉化して、貯蓄手段が増加されることが考へられる。その必然的結果は、より多くの勞働者の使用であるから、かゝる場合、右に述べたる事情により失職したるものゝ一部分が職にありつくことができるであらう。さうして若しも機械使用の結果として、生産の増加が甚だ大であつて、以前總生産物の形で存在してゐたと同量の食物および必要品を、純生産物の形で與へることができらば、全人口を使用することができ、隨つて何等の人口過剰も必然的には起らなかつたであらう、とりかアドは云ふのである。この問題に對する結論としてリカアドは次の四項を擧げてゐる。

1) Ricardo, *ibid.*, p. 38r. (同譯本 350頁)

「第一、機械の發明およびその有用なる使用は、常に、その國の純生産物の増加を齎らす、たとひそは、長からざる期間の後に、その純生産物の價值を増加しないかも知れず、且つ増加しないであらうとも。

第二、一國の純生産物の増加は總生産物の減少と兩立する。而して若し機械が純生産物を増加するならば、それを使用せんとするの動機は、常にその使用を保證するに十分である。たとひそは總生産物の分量並びにその價值を減少するかも知れず、又屢々爾かしなければならぬであらうとも。

第三、機械の使用は屢々勞働者の利益に有害であるとの、勞働者階級の抱懷せる意見は、偏見又は誤謬に本ついてゐないで、經濟學の正しい原理に一致する。

第四、若しも機械使用の結果として、改良されたる生産手段が一國の純生産物を、總生産物を減少しないやうな大きな程度に於て、増加するならば（私は常に貨物の分量を意味し、そして價值を意味しない）、しかる時は總ての階級の地位は向上せしめらるゝであらう。地主および資本家は、地代および利潤の増加によつてはなくて、その價值が著しく減少せるところの諸貨物に、同一の地代および利潤を支出することから結果する諸便益によつて利益を受けるであらう。他方に勞働者階級の地位も亦著しく向上せしめらるゝであらう。第一には、召使に對する需

要の増加から、第二には、かゝる豊富なる純生産物が與へらるゝ所の收入よりする貯蓄に對する刺戟から、そして第三には、それに彼等の勞賃が費されたるどころの凡ての消費物の低い價格から¹⁾(註)。

(註) リカアドが引用し、そして又マルクスが問題とせるバアトンの機械使用の勞働者階級に及ぼす影響についての見解の一端を示せば左の如し。

『勞働に對する需要は流動資本の増加に依存し、そして固定資本のそれに依存しない。これら二種の資本間の比例が、總ての時に於て及び凡ての國に於て同一である、といふことが眞實であるとすれば、しかる時には實に使用さるゝ勞働者の數は國家の富に比例する、といふ結論が生ずる。しかしかゝる状態はありさうにもない。技術が發達せしめられ、そして文明が進歩さるゝに従つて固定資本は流動資本に對してより大なる比例を保つやうになる。英國モスリンの一片の生産に使用さるゝ固定資本の額は、印度モスリンの同様なる一片の生産に使用さるゝ額よりも少くとも百倍、恐らくは千倍より多いであらう。而して使用さるゝ流動資本の比例は、百倍或は千倍より少いであらう。一定の事情の下に於ては、勤勉なる國民の年々の貯蓄の全部が固定資本に附加さるゝであらう、——かゝる場合にはそれは勞働に對する需要を増加するの結果を有たないであらう、といふことは容易に信ぜられる』。

このリカアドの機械論には勿論いろいろの缺陷があるが、なほこの重大なる問題——機械使用の勞働者境遇に及ぼす影響——について何人も満足なる解答を與へ得なかつた時に於て、マカロツク、ミル、シニョア等より離れて兎も角この問題の重要な部分を指示解明したのはリカアドの偉大なる寄與の一つである。而してこのリカアドが機械使用の勞働階級に對する影響に關する

- 1) Ricardo. *ibid.*, p. 383-4. (同譯本 354-6頁)
- 2) Barton, *Observations on the Circumstances which influence the Condition of the Labouring Classes of Society*, 1817. Ricardo, *Principles*, p. 387に據る。

見解は、(一)労働者階級の將來觀を資本家對労働者との對立的關係に於て見たることに於て、(二)社會關係的事實に於て見たることに於て、特徴を有つてゐるのであつて、特に吾々の興味を惹くものがある。

以上吟味したる所により、リカアドの労働階級の現在及び將來觀の主要を見たのであるが、今それについて二三の問題を問題とせんに、第一に彼れの右の見解のうちには樂觀的悲觀の見解が入り亂れて存在してゐる。

その樂觀的見解としては、(一)労働者の生活狀態——勞賃の自然價格——は必らずしも單り生理的限界によつて決定さるゝものではなく、時と處とにより可變的な文化的慣習的限界によつても亦決定される。のみならず労働者の生活規準は、隨つて又勞賃の自然價格は、労働者自身が性生活に於て節欲克己の努力を爲すと同時に、文化的欲望を啓發することにより、向上維持し得らるゝの可能性がある。(二)資本家的社會の發達の初期に於ては、労働需要増大の結果、勞賃は騰貴するの傾向がある。(三)機械の使用により勞賃低下するの傾向があると云ふも、若し機械使用の結果、純生産物が總生産物を減少しないやうな大なる程度に於て、増加するならば、労働者も亦便益を享けその地位を向上する望がある。

次にその悲觀的見解ともいふべきものを摘記せんに、(一)勞賃の市場價格はその自然價格より一

時的に上昇することあるも、人口は則の存在のため、いつかはその自然價格に歸着せざれば止まぬ。而もこの自然價格は勞働者及びその家族の生活資料の價格である。(二)資本蓄積の増進→人口増加→穀物需要の増進→劣等地耕作→穀物價格騰貴→地代發生→勞賃騰貴→利潤率低減→資本蓄積の緩漫→勞働需要の減退→勞賃下落の過程により、社會の進歩に伴うて、勞働者の境遇は惡化するに至る。(三)機械使用の進歩に伴ひ、固定資本は流動資本に對しより大なる比例を保つに至るがゆゑに、『總所得』は『純所得』に比例的に増加し得ないがゆゑに、勞働に對する需要は減退し、勞賃は低下し、勞働者の状態は悲觀すべきものとなる。

リカアドの勞働者境遇の現在及び將來觀を敢て切り離して觀察すれば、右の如き樂悲兩様の見解が見出されるのであるが、しかし彼れのこの點についての見解がもとゞ悲觀的なるものであり、且つ彼れの思想的發展に伴ひ漸次その色彩が濃厚となるに至つたことは疑ふべくもない。然らば次に彼れのこの悲觀的觀察は如何なる根據に本づけるかを見んに、その理由として大約(一)自然的(二)社會的の二つの理由を擧げ得るであらう。

勞賃の自然價格と市場價格との一致の機構及び社會の進歩に伴うて勞賃の漸次下落するに至るの理由を、リカアドは結局に於て、マルサスの人口原則および土地收穫遞減の法則に歸してゐる。これらの諸法則が自然科学的法則であることは云ふ迄もない。この自然科学的法則により直

接は社會現象の本質を説明せんとするは、リカアド經濟學の特徴乃至缺陷を成すのであつて、かくては勞賃の本質及びその社會の進歩に伴うて惹起される變動を有效に説明すべくもない。しかるに機械使用の勞働者階級に及ぼす影響は彼はこれを純然たる社會的理由に本づけてゐる。而も彼はこの點に於て當時の他の諸學者と離れて、可成り正しい見地にあり、舊説を惜しげもなく拋棄して、その科學に對する忠實さを示した。だが彼れのこの種の見解は前者の自然科學の見解と最後迄入り亂れて残つたのである。

この點について第三に問題となり得るものは、リカアドが人口原則、土地收獲遞減の法則の存在及び地代の發生、増加により、勞賃の相對的下落を論じたる場合には、彼は勞賃を、利潤との共同の利害に於て、地代に對抗して論じてゐる。即ち彼れの主として意圖したる所は、地代の不勞所得たることを瞭にし、地代は利潤、勞賃の犠牲に於て社會の進歩に伴ひ益々増加すべきことを主張したのであつた。しかるに機械の使用の勞賃に及ぼす影響の條に於て、彼は勞賃を利潤との對抗關係に於て論じてゐる。それは資本家的社會の二大階級對抗の關係に觸れてゐる。

この態度は利潤と勞賃との對抗關係を彼が屢々口にしてゐるよりして、さして不思議とするに足らぬが、併し社會進歩に伴うて惹起される階級利害對抗の激化を不十分乍らも瞭にしたることは彼れの貢獻であると云はねばならぬ。この地主對資本家、勞働者の關係の考察より、資本家對

勞働者の關係の考察への推移の過程は、リカアドの著しい思想的發展の一つと目すべきであらう。

三 リカアドの勞働政策

リカアドは斯様に勞働階級の現状並びにその將來の必然性（若くは寧ろその靜的並びに動的考察）を見ることによつて、如何なる勞働政策を提言したであらうか？ 或は又凡ゆる方策の畢竟無効に了るべきことを云つて、それが提言、施行を排したであらうか？ 私は茲にこの問題を若干詮索して見たいと思ふ。

リカアド經濟學、政策に社會哲學とも謂はるべきものを搜せば、それは云ふ迄もなく功利主義の哲學、自由放任主義である。それに依れば、現今の制度にはそれに伴ふ幾多の弊害があるにしても、それは事物の自然（功利の原理）に本づくものであつて、人爲の如何ともすべからざるものである。勞働政策の問題についても亦同じく、勞賃の變動は右述べたるが如く、諸々の原因によつて左右せられ、勞働者階級狀態の現在及び將來は可成り悲觀すべきものであるが、他の契約の場合に於けると同じく、勞賃は市場の公平且つ自由なる競争に放任さるべく、決して立法の干渉によつて制御してはならない。かくてこそ社會の最大部分の最大幸福が齎される、と彼は云ふ

のである。それゆゑにリカアドは凡ゆる他動的なる政府の勞働政策を排する。救貧法に對する彼の反對はその著しい例證の一つである。

リカアドに従へば、救貧法は立法者の信ずるが如く、貧民の状態を改善しないで、富者ならびに貧者の状態を益々悪化するものである。この法律は貧しきものを富まさないうで、富めるものを貧しくする。若しこの法律にして引續き有效であるならば、貧民救助のための資金は益々増加し、遂には國家の總ての純收入を全部吸収してしまふやうになることはこの自然である。今迄はさうではなかつたが、若しこの法律によつて、生活資料を缺ける人々は誰でもそれを受けることができるならば、そして可成り安易な生活を爲すことができる程度にそれを獲ることができれば、恐らくは他の凡ての租税を合しても、なほ救貧税の方が多額に上るといふやうなことになるかも知れぬ。かくの如くならば、『富と力とを貧と無力とに化せしめ、單に生活資料を供給すること以外凡ての目的に對する努力を拋棄せしめ、凡ての知識的卓越を無にし、肉體的の欲望を供給することに絶えず精神を勞せしめ、かくて終に凡ての階級を全般的なる貧乏の病に冒さしむる』¹⁾、といふやうな法則が行はるゝに至るもので、この法則たるや、リカアドに於ては、引力の原理の確かなるが如く確かなのである。であるからリカアドの主張に従へば、救貧法を廢止しようと思せず、それを修正しようとするの凡ゆる計畫は一顧の價値もないので、それを如何に最

1) Ricardo, *ibid.*, p. 86. (同譯本 169頁)

も安全に、しかも最も平靜に、廢止するかを指示することのできる人こそ、貧民の、そして又人道のための最良の味方たるのである。

このリカアドの救貧法廢止主張の主なる根據は、いふ迄もなくマルサスの人口原理である。故に貧民の困窮を救濟するには、凡ゆる慈善的なる救濟手段は結局無効に了るべく、たゞ唯一の方途は、勞働者自身に獨立の價値を印せしめることにより、自分の生活維持のために努力せしめ、且つ性生活に於ける慎重と遠慮は結局自己の利益を齎らすものなることを教へることにある。斯くて吾々は漸次より健全なる状態に近づくであらう、とリカアドは云ふのである。蓋し『貧民の愉快と幸福とは、彼等の注意又は立法者の努力により、彼等の人數の増加を抑制し、そして彼等の間に早婚や輕卒なる結婚をより、少くするやうにしなければ、永久に確保され得ないといふことは、疑を容れざる一の眞理であるからである』¹⁾。

斯様にしてリカアドが勞働者の貧困状態を救濟し、改善するの途は、國家の諸方策でもなければ、又慈善的救濟の諸事業ではなきは勿論、更に又勞働者自らの團體的運動の努力でもない。それはたゞ勞働者の良心に獨立心を養はしめ、なる丈け節儉を爲し、結婚を慎しむことは結局彼等に利益ある道德であるといふことを彼等に教へることに外ならない。リカアドはこの點に於て徹頭徹尾自由放任主義者であり、個人主義者であり、又運命主義者であつた。この點に於てリカア

1) Ricardo, *ibid.*, p. 84. (同譯本 163頁),

ドはマルサスとその態度を同じうし、ジョン・ステュアート・ミルははゞこの態度を忠實に踏襲したるものである。(註)

(註) リカアドの救貧法の無效、労働者の自力による自己の境遇改善についての見解をなほ一つ引用すること左の如し。

『私は貧民の状態に對するあなたの見解を特に敬ぶものである。彼等の勞賃の不十分を救ふ最も有效なる方案は、彼等自身の手にあるといふことを彼等に幾度云つても云ひ過ぎるといふことはない。私はあなたが、樹立せらるべきよい制度に對する凡ゆる障害を除き去ることに成功せられんことを望む』¹⁾

なほブカナンが立法によつては救済し得ない貧窮があると云へる詞にリカアドが參同してゐるのを見よ。²⁾

四 リカアド労働者階級觀の科學性

功利主義哲學

リカアドが労働の自然價格を説いては、それに慣習的文化的要素を含ませ、又労働者自身の努力によつては労働者の生活規準即ち労働の自然價格を改善向上せしむることの可能を云つたことから、リカアドは決して酷薄なる勞賃論を説いたものではなく、彼も亦『人道の友』たり得るのであると云ふものがある(マーシャル)³⁾。又或學者(デイル)⁴⁾の主張する所に依れば、リカアドの經濟學は或るもの、云ふが如く、資本家階級の利害を代表したるものではなく、彼はたゞ經濟事象の本質の闡明に専心したるのみである。若し彼が片面的にかゝる階級的利害を代表したるも

- 1) Letters of Ricardo to Malthus, p. 166. なほ Letters of Ricardo to Trover, p. 48. 參照。
- 2) Ricardo, Principles, p. 83 note.
- 3) 前出。
- 4) Diehl, Erläuterungen, II, S. 45off.

のであるならば、彼は科學の歴史に於て何等の地位を占むることができないであらう、斯く彼を解釋するものはリカアドの人格の眞の根源を知らざるもので、たゞ彼れの科學的著作にのみ頼りて彼を解釋せんとするものである、若し彼れの深い世界觀、人世觀を彼れの全著作、彼れの書簡集、彼れの知友の詞について見るならば、彼れの言動は悉く科學の眞實性を客觀的に探究せんとするに出づるもので、決して個々の階級、職業の利益を追及するがために出づるものでないことがわかるであらう。

右の如くリカアドを人道主義者の一人であるとなし、又冷静公平なる科學者であるとして、彼れの業蹟を價值づけようとするとは全然反對に、彼を最も酷薄なる産業資本家の利害の代表者であるとなし、彼は彼れの科學的冷酷、その獨特の抽象的方法を以て、自己の階級の利益を科學的假裝の下に追及せんとしたのであると云ふものがある（ヘルト）。しかしこれらの相對立するリカアド觀は誤解乃至不十分であると思はれる。

問題を際にするがためには、問題をリカアドの勞働階級の現在及び將來觀の科學性とその前提乃至基調を成すところのベンタムの功利主義哲學および自由放任主義とに一應分ち考へるのを便宜とする。

功利主義哲學はさきにも一言したやうに、その初め神學的形而上學的獨斷論とも目すべきもの

であつたが、ペンタムに至りてそれは最大多数の最大幸福の原理となり、社會哲學として又道德原理として、一の學問的成形を得るに至り、政策としての自由放任主義は苟も學問的に基礎づけらるゝに至つたといはれる。勿論この考へ方には異論がないわけではない。蓋しフイジオクラートが自然の秩序をして神の思召に本づくものとしたことは誤りであるにしても、彼等がそれを社會の物理的形態として、即ち生産そのもの、自然的必然より發生し、人間の意思、政策その他より獨立なる形態であると見たことは彼等の大なる奇與であるからである。この點に於てペンタム流の自然法觀はこの世界を社會關係より離れたる孤立人の意思・感情より出發、説明せんといふことに於て寧ろフイジオクラートより劣れるものがあると言へる。それは兎も角リカアドは經濟學および政策の基調として、勿論この哲學、世界觀を背景的に有つてゐたと目すべく、右に述べたるが如き勞賃論も、勞働政策も皆この哲學、この世界觀の上に立脚せるものと見るべきである。

アダム・スミスおよびリカアドは假想の世界に屬するところのロビンソン物語的の孤立せる個人から出發して、當時の資本家的社會に於ける凡ゆる經濟現象を説明しようとした。彼等は社會の關係、形態から全然離れたる抽象的なる人間性の分拆から出發することにより、若くはそれを前提することにより、彼等に於ては永遠に亘り恒久に存続すと考へられたるところの經濟現象の

本質を把握し得ると考へたのである。ベンタムの功利主義哲學も亦同じく、當時の社會關係と何等の係はりのないと考へられたるところの孤立人の心理の解剖分拆から出發し、その個人の快樂、幸福の最大分量の享受を以て人間最高の目的であると解し、各個人の幸福を追及せんとする利己的性情に本づく活動の放任は各個人の最大幸福を結果するのみならず、延いて社會の幸福——最大多數の最大幸福を齎らすことを信じたのである。彼に於ては、社會は個人の單なる集合に過ぎないものであるが故に、個人の利益と社會の利益とは、個人の利己的活動の放任により、容易に調和一致し得られたのである。リカアドの如きは、マルサスと共に、スミスとは異なり社會の現在および將來につき可成り悲觀的見解の下にあつたことは事實である。即ち彼等はこの個人の利己的欲望の追及を原則とせる社會に於ても、現前の事實として、幾多の弊害——特に産業革命の成就に伴ふ勞働者窮迫の事實を認めざるを得なかつた。わけてもリカアドは産業資本家階級（及び勞働者階級、社會の消費者一般）と地主階級との利害の衝突を明らかに意識したのであり、かの有名なる地代論はこの意識に於て生れたのである。けれどもなほ且つ個人の利己的活動と社會の幸福とは結局に於て一致し得るものであり、假令若干の弊害、不調和あるもこの原則の前には致し方がないものとリカアドは考へてゐたのである。これ功利主義哲學が、自由放任主義が、更に又彼れの經濟學が當時の社會の現状肯定の哲學であり、政策であり、經濟學であつた所

以である。リカアドにとりては、封建的社會は人爲的社會であり、歴史的社會であつたが、彼等の社會は永遠性を有つてゐる自然の社會であつた。

ところがこの孤立的の「經濟人」より出發せる、又個人の自由なる利己的活動の是認に本づく、彼等の哲學、世界觀、經濟學、政策は、決して彼等の信するが如く、永遠に妥當するものではなく、それらは、彼等の無意識に拘はらず、當時の生産關係の發達段階に於ける支配階級の世界觀であり、經濟學であり、政策に外ならないのである。最大多數の最大幸福と云ふも、それは彼等資本家階級の立場から云へるものにすぎず、この原理から直ちに推論し得らるべき勞働者階級の立場から見たる最大多數の最大幸福は彼等の問題とせざる所であつた。かの後に至つて勞働者階級自身の利益の主張としての勞働組合運動が勃興し來れる時に、最先にこれに對抗し、その運動の結局無効なるべきことを宣言したのは、この功利主義哲學を擔へる古典學派經濟學の勞賃基金説であつた。功利主義哲學は當に彼等支配階級の當時の資本家的社會の發達段階に於けるイデオロギーである。かく解してこそ吾々は功利主義哲學を歴史的に價值づけることができるであらう。

なる程リカアドは當時の社會の立派なる一紳士であり、社會國家を思ふこと人に譲らざる一人格者であつたかも知れぬ。だがそれだからと云つて彼がその一員である支配階級の、わけても産

業資本家階級の利害を代表してゐないとは云はれぬ。誰しも人類の味方たる前に先づ何等かの階級の一員とならねばならぬ。いづこの階級に屬せずして、人類の味方、社會公共の利益の代表者たり得ることは不可能である。リカアドが當時の新興の資本家階級の利害の代表者として、その階級の世界觀たる功利の原理を支持したことは疑ふべくもないのである。

斯くりカアドは資本家階級の利害の代表者として、功利主義をとつたのであるが、このことは彼をして當時の最良の經濟學者たり得ることを妨げるものではなかつた。蓋し資本家階級の利害の代表者と眞摯公平なる科學者とは、當時の資本家的社會の發達段階——前批判期に於ては、一致し得るからである。それ故にリカアドが資本家階級の利害を代表したからとて、ヘルトの如く、それ故に彼れの經濟學——勞賃論の科學性を疑ふことはできぬ。といふのは茲に資本家階級の利害を代表するといふも、ヘルトの云ふが如く、決して資本家階級の利益を積極的に辯護、追及せんがために、科學の客觀的眞實性より離れて、論議することを意味しないからである。リカアドはその科學的公平と眞理に對する愛好心を以てしては、マルサスの如くに、科學の客觀的眞實性を離れて、自己の階級の利益を、科學の名の下に追及、主張することはできなかつた。資本家階級のイデオロギーと云ふも、リカアドの經濟學とマルサスのそれとの間には著しき差異がある。よし『リカアドの見解が全く有産者の利益に於てあらうとも、たゞその利益が生産の利益

と、又は人間的勞働の生産的發展と一致してゐるが故であり、又然る限りに於てゝある¹⁾。だからこの二者が相一致しない時には、リカアドは勞働者及び貴族に對して無關心であると同様、有産者に對しても無關心である。マルクスはこのことを證明するためにリカアドの詞の二三を引用してゐる。今それを追はんに、リカアドは云ふ――

『或る特別な階級を顧慮するの餘り、その國の富及び人口の進歩を阻害することあれば、私は大いに遺憾とするであらう』。²⁾

この詞により、リカアドは穀物の輸出が自由になれば、土地は拋棄せられるが、工業的生產は促進される、故に土地私有は生産の發達のために犠牲にせられる、ことを意味してゐる。

『二〇、〇〇〇磅の資本（その利潤は年二、〇〇〇磅）を所有せる人に對しては、彼れの資本が百人を使用しようが、千人を使用しようが、又生産されたる貨物が一〇、〇〇〇磅で賣れやうが、二〇、〇〇〇磅で賣れやうが、そんなことはどうでもよいであらう。たゞその何れの場合にも、彼れの利潤が二、〇〇〇磅以下に減少しないならば、國民の眞の利害もこれと同じではないか。その純收入、その地代、利潤が同じであれば、その國民が千萬人の住民から成らうが、千二百萬人の住民から成らうが、そんなことは大した問題ではない』。³⁾

こゝでは勞働者が富のために犠牲にせられてゐる。この文章は他の多くの學者が屢々引用し、

- 1) Marx, Der wissenschaftliche Charakter von Malthus und Ricardo, Die Neue Zeit, 1925, S. 817. Theorien II, 1. S. 310-1.
- 2) Ricardo, An Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of Stock, 1815. Economic Essays, p. 252.
- 3) Ricardo, Principles, p. 336.

以てリカアドが勞働者階級に對して如何に酷薄であつたかを示さうとする。

『若干の資本が失はれるであらうことは否定できぬ。だが資本の所有又は保存は最後の目的であるか、手段であるか？ 疑もなく手段である。吾々の欲する所のは貨物の富有である。だから若しも吾々の資本の一部分を犠牲にすることにより、吾々の享樂および幸福に役立つところの目的物の年々の生産物を増加することが證明され得るならば、吾々は、吾々の資本の一部分を失ふも不平を云ふべきではない、と私は思ふ』。

こゝに『吾々の資本』とは、吾々にもリカアドにも屬しないで、資本家によつて土地に投せられてゐる資本を意味してゐる。がこゝに『吾々』とは、國民の平均である。『吾々の』富の増加は社會の富の増加である、そしてこの富の増加は、かゝる目的として、この富の分配に與かるものには何等關係するところがないのである。

科學の客觀的眞理性は階級の利害、要求と離れて獨立に存在する。リカアドは當時の産業資本家階級の代表者であつたに拘はらず、その公平眞摯なる科學的眞理の愛好者であつたが故に、當時の最良の經濟學者として、科學の歴史に極めて主要なる地位を占めるのであるが、しかしリカアドと雖も亦時代の子たることを辭するわけには行かぬ。彼が如何に明徹冷靜なる頭腦を有し、

何人にも譲らざる科學的愛好心を所有したであらうとも、彼れの時代、その資本家階級の一員たることから超越することはできぬ。それは歴史的必然である。彼は、その當時の支配的イデオロギ―に支配せられ、ベンタムの功利主義を採用し、自然的運命觀に立脚することにより、當時の最良の經濟學者たり得たのであるが、同時にそれらのイデオロギ―に支配さるゝ限り、その經濟學、勞賃論の科學性は局限せられざるを得ない。經濟現象わけても勞働者階級の現在及び將來觀に對する非歴史的、非社會的認識、そのベンタム流の功利主義的自然觀、運命觀等々は、その時代の一段の發展によつて止揚せられねばならぬ。ベンタムの功利主義的世界觀を止揚するものは何か？止揚する限りそれはこの功利の原理を止揚契機として包攝するものでなくてはならぬ。(三、八、六)